

# 20世紀初頭、ロシア地方部の社会生活における 極東と日本：カザン県を事例に

リリヤ・ガブドゥラフィコヴァ  
(翻訳：櫻間 瑛)

序

1. 日露戦争以前の地方の経済・社会生活における極東
2. 日本への特別な視線
3. ロシアにおける日本文化の商業的成功
4. ナカムラ・コウスケー日本からの正教宣教師

おわりに

## 序

ロシアと日本の接触及び相互関係は、数百年に及んでいる。この歴史的経験、地理的状况、北東アジアにおける共通の関心が、経済や文化、学術分野を含む、両国の活動の様々な分野における戦略的パートナーシップ発展の基礎となっている。各地域間のパートナーシップの強化は、こうした活動の重要な傾向として認めることができる。こうした相互活動の一例となったのが、2015年及び2016年に、松江市とカザン市で行われた国際学術会議「タタール世界と日本の文化、経済、技術関係：歴史と現在」である。この会議では、タタールと日本人の接触がユニークな特徴を有しており、その歴史は中世初期にまで遡り、さらなる多面的な学術的分析の必要があることが確認された。

双方の接触と文化的な影響が、複雑かつ充実していた時代は、19世紀後半、アレクサンドル2世によるブルジョワ改革の時代であった。この方針は、その後継者たちも堅持した。1904～05年の日露戦争は、ロシアにおける「日本表象」の発展の重要な時期となり、その表象は社会の広範な層の間で日本への関心を高めた。

本稿において、ロシア帝国内の地域の一つとして研究対象となるのはカザン県である。この県は沿ヴォルガ地域に位置し、カザン市を中心とするかつてのカザン＝ハン国の領土に対応しており、国家としての歴史とともに、手工業や商業、宗教文化の長い伝統も有している。帝政期において、カザンは様々な行政単位の大中心地であり、カザン教育管区、カザン司法管区、カザン軍管区が存在していた。これらの管区は、最大10の県を包括して

いた。

カザン県は、常にその民族的、宗教的な構成において独自性を有していた。この県の先住民族はムスリム・タタールである。タタールは、ジョチ・ウルスの住民の子孫であり、ロシア帝国内の各地に分散して居住していたが、20世紀初頭までに経済的、文化的中心をなしていたのはカザン県であった。カザンはムスリムの宗教教育、タタールの出版活動、マスメディア、文学、音楽、演劇、流行の分野の先端に立っていた。

19世紀の初頭に、カザンがロシアの東洋学の中心に選ばれたのは、偶然ではなかった。カザン大学では国内で唯一のアジア系出版所があった。学術的な問題から生じた東洋諸民族への関心は、後に宣教的な性格を持った課題に変貌した。カザンには、宣教に特化した学術機関があり、その中でもカザン神学アカデミーでは帝国全土及び外国での正教宣教のための宣教師の育成が行われていた。

カザン県の社会経済活動は、この地域の経済的潜在能力により充実していた。地理的な利便性、交通網（河川交通を含む）、豊富な労働資源（安価な労働力）は、この地方の工業発展の要因となった。カザン県では、国営・民営の工場が稼働しており、特に化学、繊維、皮革産業が発達していた。

この興味深い地域を例にとり、本稿では地方社会の極東及び日本への関係、さらには両国の個人に注目して、ロシアと日本の相互関係の歴史について検討する。

## 1. 日露戦争以前の地方の経済・社会生活における極東

19世紀末、ロシアにおいて日本への関心が高まった。これは、一方では日本の「開国」と関連しており、他方ではロシア帝国の極東への関心に関わっていた。例えば、ニコライ2世は皇太子時代、世界一周旅行中の寄港地の一つに日本を選んだ。ニコライは1891年に訪日し、すっかり魅了された。暗殺未遂事件も若者に特有の屈託さで受け入れ、事件そのものもすぐに忘れてしまった<sup>1</sup>。

極東地域の獲得により、ロシア内陸部諸県社会にも、より頻繁にこの地域に関連する課題が生じるようになった。例えば1870年代には、政治犯がサハリンに送致されるようになった。30年後には、既にサハリンで、民族的にも地域的にも多様な地方共同体が形成されていた。首都サンクト・ペテルブルクで特に懸念されたのは、流刑者の子弟であった。サハリンには、学校や孤児院のような社会インフラが整備されておらず、首都の人々から見ると、現地の生活条件はこの子弟たちに悪影響を及ぼすものであった。1900年までに、流刑者家族保護協会により、サハリンに3つの孤児院が設置され、120人の児童が収容された。1900年には、新孤児院建設のための募金が行われた。協会による呼びかけでは、「サ

---

1 Схиммельпенник ван дер Ойе Д. Навстречу Восходящему солнцу: Как имперское мифотворчество привело Россию к войне с Японией. М., НЛЮ. 2009. С. 30-32.

ハリンには2000人以上の児童がいて、そのほぼ全員に衣食住、学校教育が必要で、現地の生活の恐ろしい墮落した状態からの救済が求められているのです」とされていた<sup>2</sup>。カザン県では、同協会によるサハリン児童向け支援金の収集は県当局が担当し、1903年の春まで募金が継続した<sup>3</sup>。

サハリンが帝国の最東端であったとすれば、中国は19世紀にすでにロシアの影響下にあった。例えば、すでに1830年代には中国にタタール人移民が存在していた。その多くは、ロシア中央部及び沿ヴォルガ地域の出身者であった。ムスリムが故郷を捨てた主な理由は、帝国の軍隊に出仕することを望まなかったことである<sup>4</sup>。1874年の軍制改革まで、徴兵期間は25年にも上った。同時に、商売っ気あふれるタタールにとって、新たな商業発展の可能性は魅力的であった。1851年に中国とロシアの間で結ばれた協定により、グルジャとタルバガタイで、ロシア臣民向けの貿易関税が免除となった。そのため、1860年代には多くのタタール移民がグルジャに居住し、その大部分は貿易に従事していた<sup>5</sup>。

19-20世紀にかけて、東清鉄道の建設に関連し、郷里の土地不足に困窮したロシア人農民が新たな収入源を求め、経済状態を改善するために、極東へ移動した。この農民たちは、森林伐採に従事したり、鉄道建設に参加し、後には鉄道会社に勤務するようになって、新駅のインフラ整備を行なった。20世紀初頭には、ハルビンにロシア人居留地が形成された。

極東志向は、大企業家にも大きな利益をもたらした。例えば、アラフゾフ商会やカザンの軍服生産工場は、1900年の中国における義和団事変や日露戦争時の大量注文のおかげで、沿ヴォルガ地域で最大規模の軍需企業となった<sup>6</sup>。

東方において、ロシア行政施設の他にロシア権力の存在を示していたのは、ロシア正教の教会であった。そのため、ロシアの内部諸県では、教会建立のための資金集めが積極的に進められていた。1903年には、プリアムール及びブラガヴェシエンスク主教が、各県知事に対し、ブラガヴェシエンスク大寺院建立のための資金集めを要請した。さらに、「中国人の侵略からのブラガヴェシエンスク市の奇跡的な救出と、東方の不信心な諸民族に対する我々の聖なる祖国の榮譽の永遠の記念」への援助も求めた<sup>7</sup>。「自発的」募金に

---

2 Национальный архив Республики Татарстан (以下 НА РТ). Ф.1, Оп.4, Д.88, Л.3.

3 НА РТ. Ф.1, Оп.4, Д.88, Л.28.

4 Мы из Китая. Сборник воспоминаний. Алматы. АВС. 1999. С.129.

5 Хамамото М. Связующая роль татарских купцов Волго-Уральского региона в Центральной Евразии: звено «Шелкового пути Нового времени» (вторая половина XVIII – XIX вв.) // Волго-Уральский регион в имперском пространстве XVIII-XX вв. М., Восточная литература. 2011. С.53-54.

6 Габдрафикова Л.Р., Измайлов Б.И., Салихов Р.Р. Фирма Алафузова (вторая половина XIX – начало XX века) : промышленная история России. Казань. Институт истории им. Ш.Марджани АН РТ. 2015. С.81.

7 НА РТ. Ф.1, Оп.4, Д.1017, Л.1.

関するカザン県の公式な要請に地元当局の代表は応じて、ブラガヴェシエンスクでの教会建設に対する、カザン県住民からの募金総額は約332ルーブリに達した<sup>8</sup>。これは、かつてのサハリンでの孤児院建設のために集められた額をはるかに超えるものであった。住民は教会の需要への寄付により熱心であったのであろう。

日露戦争は、地方社会に新たな優先事項を提示することとなった。日露戦争の開戦直後に、カザン県の要人たちは、君主への忠誠を誓い、自らの愛国心を示すよう努めた。教会では特別の祈祷が行われ、皇帝に向けて臣民としての忠誠心が送られ、海軍及びロシア赤十字への志願票が発行された。全体で見ると、戦時徴用として各戸に10-15コペイカを課したことで、各郡で数千ルーブリと、これまでの孤児院や教会への寄付と比較して膨大な額を集めることとなった<sup>9</sup>。例えば、チェボクサルィ郡の3つの郷では、1904年3月20日までに6428ルーブリを集めた<sup>10</sup>。もちろん、ここで重要であったのは、広範な国民が動員され、予備役の兵士も前線に送られていたことで、実際寄付は自分の親戚や隣人に向けたものであった。

当時、前線からはすでに障害者が戻ってきており、一家の大黒柱を失った者や農家は新たな条件下での生活を余儀なくされていた。戦没者補償があまりに膨大だったために、慈善団体も全員を対象にすることはできず、その活動を制限していた。当時優先されていたのは、地元住民に対する援助であった。例えば日露戦争中、ハルビンの東清鉄道会社は、地元の孤児院への援助の必要性に関する手紙を送ったが、カザン社会の反応は極めて冷淡なものであった。ハルビン孤児院は1903年末に設立され、13歳未満の児童35人を養っていた。東清鉄道会社は軍事攻撃を恐れ、孤児院の疎開の準備を行い、内部諸県の孤児院に対してハルビンの孤児の引き取りを要請した<sup>11</sup>。孤児とともに、孤児院の資産2万4000ルーブリも提供した。しかし、カザン県でこの提起に応えたのはカザン市のオリジンスキー勤労孤児院のみで、最大6名の児童引き受けに同意した。孤児院監督官の弁明によると、すでに「今回の戦争での負傷により死亡した、下級官吏家庭の孤児4名の対応を引き受けていた」のである<sup>12</sup>。

帝国の東で生じた紛争のもう一つの側面として、敵国人の抑留があった。日露戦争の初期から、ロシア全土にわたって、国外送致のために日本国民が集められた。1904年9月1日、内務省警察局からカザン県に対し、以下のような命令が下された。「米国大使館との合意により、現在トムスク、ペルミ、ヴォログダ各県に抑留されている日本国民全員、約1000名は9月15日までにペルミに集められる。そこから日本国民は、船でリュビンス

---

8 HA PT. Ф.1, Оп.4, Д.1017, Л.19-29.

9 HA PT. Ф.1, Оп.4, Д.1380, Л.2.

10 HA PT. Ф.1, Оп.4, Д.1380, Л.31<sup>06</sup>.

11 HA PT. Ф.1, Оп.4, Д.1749, Л.1.

12 HA PT. Ф.1, Оп.4, Д.1749, Л.6.

クに送られ、そこから鉄道でヴェルジュボロヴォ<sup>13</sup> 経由で国外へ送致する」。県知事に対しては、日本人が沿岸に逃亡せず、局外者の護送船への接近を制限するために、停泊場の警備が要請された<sup>14</sup>。すでに9月7日には、707人の日本国民を乗せた、最初の護送船がカザンに到着した<sup>15</sup>。9月19日には、ペルミからカザンに向け、130人の日本国民を乗せたもう1隻の船が出発した。さらに9月24日には、117人の日本人を乗せた船が後に続いた。その多くは女性（87人）で、男性は22人であった。さらに、船には8人の児童も乗っていた<sup>16</sup>。軍警察署長は県知事に対し、これらの船の到着に際し、いかなる予想外の事態も見られなかったと報告した。

日本人の国外退去に関するこうした措置にもかかわらず、カザン県領地内には、1名の日本人、コンスタンティン・ニコラエヴィッチ・シオタロウがいた。彼は、カザン市内スタロゴルシエチュナヤ通りにあるマルソフ家に居住していた。これは、県中心都市の商人地区であった。1905年10月25日から、日本国民に対しては、警察の秘密監視が行われていた<sup>17</sup>。おそらく、シオタロウはその信仰のために、国外退去の対象となっていなかったのであろう。そもそも、正教に改宗した外国人に対しては、特定の特典が与えられていた。

## 2. 日本への特別な視線

1905年以降、日本は国際舞台における権威を高めていった。ロシア人の間では、この謎の国に対する関心は、さらに強まっていた。検閲による制限があったにもかかわらず、新聞などでは、極東戦線からの報告だけでなく、日本の生活や文化についての感想もだんだんと掲載されるようになった。こうした記事は、大抵、西洋での報道を翻訳したものであった。極めて保守的で、右派の新聞である「カザンスキー・テレグラフ」も例外ではなかった。そこでは、日本はほぼヨーロッパの国であり、文化の発展においてロシアを凌駕しているとされている<sup>18</sup>。日本人の成功の理由について論じる中で、「ヴォルジュスキー・リストク」紙では、1905年に「日本人は、ヨーロッパの科学や技術を熱心に取り入れているだけでなく、自らの発展のためにさらに多くのことをなし、ヨーロッパの経験を自らの独自の経験で補っている」と報じている<sup>19</sup>。しかし、「カザンスキー・テレグラフ」

---

13 現ヴィルバリス（リトアニア）。

14 НА РТ. Ф.1, Оп.6, Д.259, Л.1.

15 НА РТ. Ф.1, Оп.6, Д.259, Л.25.

16 НА РТ. Ф.1, Оп.6, Д.259, Л.49.

17 НА РТ. Ф.1, Оп.6, Д.350, Л.2.

18 Зайцев В.А. Роль цензуры в освещении русско-японской войны газетой «Казанский телеграф» (1904-1905 гг.) // Ученые записки Казанского государственного университета. 2008. Т.150, Кн.1. С.110.

19 Волжский листок. 1905. №203. 12 июня.

同様に、「ヴォルジュスキー・リストク」で掲載するために準備された日本に関する記事も、全てが検閲を通過したわけではなかった。たとえば、「ヴォルジュスキー・リストク」の1905年7月1日付第218号では、検閲により日本の憲法に関する記事が削除された。その記事では、「近年日本についての知識が深まり、我々が驚嘆したことには、政治的な関係においても、日本人はより発展しており、その制度面でも、ロシア以上に西欧諸民族に適合している。我々は、本当のところを言えば、今になってようやく、日本人のおかげで自らの国家構造の欠点を理解するに至り、政府の許可を得て国家評議会附属の国民の代表からなる特別部局開設について語る勇気を持つようになった」と書かれている<sup>20</sup>。

筆者は、かつて「20世紀初頭のタタールの知覚における日本の形象」という論考<sup>21</sup>で、19-20世紀にかけてのタタールの社会思想及びタタール＝ムスリム世界の発展の方向性の一般的な図式を示した。その中では、伝統とイノベーションの穏健な接合の好例として、明治期の日本の経験が研究されており、タタール語の新聞や雑誌で紹介された他、文学作品の中でも日本に関する好意的な記述が見られた。タタール知識人は、日本人の勤勉さと知識への熱意を強調した。タタールの旅行家（ガブドゥッラ・イブラギモフ、サリフジャン・ウルマノフ）の中には、日本に関する旅行記を出版した者もいる。

タタール知識人による日本の表象は、非常に理想主義的なものであった。しかし、この表象はプロパガンダの一部として、西洋の盲目的なコピーをすることなく、東洋社会が発展する可能性について書かれたタタール出版物に現れていた。特に、タタールは日本社会の「民族的精神」に感嘆していた。20世紀初頭のロシア語地方出版を概観すると、西洋及びロシアのリベラルな言論界で醸成された発展した日本という表象により敬意を示していたのは、タタール知識人であった。

ここで強調すべきはこうした見方が、ロシア、あるいはアジア人に対して一定のスノビズムを見せる西欧社会の一部にとって、必ずしも典型的なものではなかったということである。いわゆる「日本びいき」の言論は、右派から厳しい批判にさらされることとなった。こうした批判者にとっては、法の秩序や言論・出版の自由といった、日出ずる国における自由主義の勝利に重点を置く形で、ロシアと日本を比較しているのが気に食わなかったのである<sup>22</sup>。一般レベルでは、「黄禍論」に関する神話が常に維持されていた。ロシアのメディアでは、常に攻撃的なアジアの隣人の表象が広められていた。風刺雑誌では、敵

---

20 Волжский листок. 1905. №218. 1 июля. Цензорский эземпляр.

21 Габдрафикова Л.Р. Образ Японии в восприятии татар начала XX века. // Культурные, экономические, технологические контакты и взаимодействие Японии и Татарского мира: история и современность. Сборник материалов Международной научной конференции, посвященной 80-летию мечети в г. Кобе (Токио-Мацуэ, 19, 23 октября 2015 г.). Казань, Институт истории им. Ш. Марджани АН РТ. 2015. С.24-32.

22 Денисов Я.А. Мнимые причины японских успехов (несколько соображений по поводу русско-японской войны) // Мирный труд. 1905. Т.3. С.147; В.Ш. Иностранцы о России // Исторический вестник. 1905. Т.99. С.658.

の視覚化のために、男性の人物像を利用しただけではなく、追加的な批判対象を作り上げた。例えば、1904-1905年には、「図々しい芸者」が風刺的な対象となった。こうした形象は、カリカチュアや随筆、風刺に利用された<sup>23</sup>。

### 3. ロシアにおける日本文化の商業的成功

ネガティブな思想的背景にもかかわらず、日本文化はロシア人の関心の対象であり続けた。日本文化の流行は、19-20世紀にかけての時期に生じた。1900年代の都市の家では、部屋のデザイン（安楽椅子、ソファ、屏風など）に「日本」スタイルが見られ、日本の版画は特に広まった。研究者は、これを神話的に「絵画の日本」と呼び、日露戦争勃発後もロシア国内で継続して、「黄禍論」に関する異なる神話と並行して存在していた<sup>24</sup>。

こうした日本への関心は、様々な形で企業により利用された。日露戦争後には、日本のサーカス興行団がロシア各地を巡業した。宣伝では、その多くが日本のミカド・サーカスで活動していたと紹介されている。例えば、「ミカドサーカスと朝鮮皇帝の宮廷芸術家」ヤマド・イタオ＝サンである。彼の幼い子供のマゴイチは、日本とロシアの公衆の寵児となった。日本の芸者役として4人の少女が舞台上に立っていた。芸術家の中には、「ジャンパーと股潜り」のバリ兄弟、「大気の息子」ミヤウチ・マニオとヤマニ・キチグクロ＝サン、綱渡り芸人のヨネゾー・ワダ＝サン、さらに劇俳優やいわゆるパントマイム俳優もいた（ソージロー＝サン、イワナガ・サワタロー）<sup>25</sup>。しかし、彼らの母国における実際のステータスは、おそらくは幾分か異なるものであっただろう。でなければ、物質的な利益を求め、彼ら芸能者がロシアにやっては来なかったであろう。

日本の興行団は、S.I. モロゼンコ監督の下で、ロシア中を巡業した。カザンでは、1910年の8月6日から9月10日にかけて興行した。興行団の総人数は20人で、そのうち11人が成人、9人は9歳から16歳の子供であった。団員の中にはヤマドやヤマノ、イソタニという同じ名字の者が多くおり、親戚同士であった。団長は、45歳のヤマダ・カメキチであった。サーカス団には、65歳の婦人、ヤマド・ジンゾが同伴していた。彼らは、みなオデッサでビザを受領していた<sup>26</sup>。

この日本人サーカス団員に関する回想は、ソヴィエト期のサーカス芸人、D.S. アリベロフが残している。アリベロフは、興行団とともにアルハンゲリスクで公演した。彼は、24人のことを記憶している。「日本のサーカス団員の中には、素晴らしい芸当に慣れている

---

23 Филиппова Т. О «бесстыжих гейшах» и «чайных домиках». Образы вражды в отечественной сатире эпохи русско-японской войны 1904-1905 годов. // Родина. 2012. №10. С.155.

24 Молодяков В. «Образ Японии» в Европе и России второй половины XIX – начала XX века. Москва-Токио. 1996. С.108.

25 НА РТ. Ф.199, Оп.1, Д.777, Л.76-90.

26 НА РТ. Ф.199, Оп.1, Д.777, Л.1.

我々すらも驚かせるような、優れた体操選手もいた。彼らは、まるで悪魔のように空中にとどまり、あたかも宙を舞うようであった。また、優れた曲芸師もいた。日本人の公演は、パレードで始まった。サーカス団員は、豪華な錦をつけ、金のローブを身につけていた。彼らは、その不思議な名前でも呼ばれながら、紹介されていた。その演目は、危険なトリックで構成され、観衆はハラハラ・ドキドキしていた。サーカス団員は、日本の服を着て町中を歩いて回った。興行団には、青年や子供も混じっていた。<sup>27</sup> 団員たちの日本での収入はわずかで、そのために遠くロシアでの幸せを求めてやって来たのであった。アリペロフの記録によれば、日本からサーカス団を連れて来た代表のモロゼンコは、サーカス団に対し、公演（おそらくは各都市毎）に対し、1000ルーブリ支払い、自らは各公演から収入を得ていた。「これがいかにモロゼンコに利益をもたらしたかは、後に彼がヴォルガ沿岸のある街に石造の家を建てたことからわかる。」とアリペロフは記録している<sup>28</sup>。

カザンから日本人団員が去った後の1910年9月末、地元警察に日本大使館から、日本人曲芸員たちの正確な所在を訪ねる書簡が届いた。1ヶ月後、大使館はカザンのニキーチン兄弟サーカスで公演した日本国民のイソタニ・イチタロー宛ての荷物を送った。そこで明らかになったことには、イソタニの両親が、イソタニ及び共に巡業をしているその姉妹と、連絡が取れないということであった。従って、彼の両親は外交団を通じてロシアで彼らの捜索を行ったのだ。日本大使は、イソタニの両親がすでに高齢であり、子供たちの将来をとっても心配しており、イソタニとその姉妹を祖国へ戻すよう説得してほしいと依頼して来ていることを伝えた<sup>29</sup>。しかし、カザンの警察は日本人を見つけることができず<sup>30</sup>、すでにロストフ・ナ・ダヌーに去った後であった<sup>31</sup>。

これらから考えると、日本のサーカス団員、特に若い者の中には、(前述の例のように)両親の意志に反してロシアに去った者がおり、一部は他のサーカス団の一員として公演を続け、一部は日本に帰国した。そのため、アリペロフが24名の日本人について記録していたのに対し、カザンの憲兵隊は20名のサーカス団員と報告しており、1年後のヘルソンでの公演ではその数はすでに18名となっていた<sup>32</sup>。どこでも彼らに対しては、憲兵隊の監視がついていたが、憲兵隊長が認めたように、何らの芳しい成果も得ることはなかった。スパイ網の中に日本のサーカス団員は認められなかったのである<sup>33</sup>。

---

27 *Альперов Д.С.* На арене старого цирка. Москва. Гослитиздат. 1936. [電子版: <http://www.ruscircus.ru/alper13>] (2016年6月30日閲覧)。

28 *Альперов.* На арене старово цирка.

29 НА РТ. Ф.1, Оп.6, Д.657, Л.12.

30 НА РТ. Ф.1, Оп.6, Д.657, Л.14.

31 НА РТ. Ф.1, Оп.6, Д.657, Л.16.

32 НА РТ. Ф.199, Оп.1, Д.777, Л.36.

33 НА РТ. Ф.199, Оп.1, Д.777, Л.18.

#### 4. ナカムラ・コウスケ—日本からの正教宣教師

ロシア第一革命の後には、スパイへの偏執がロシア内政の基本方針となった。こうした条件下では、ロシア臣民でさえ嫌疑の対象となっていた。まして、外国人は潜在的なスパイとみなされていた。1911年には、カザンの政治警察が日本人のナカムラ・コウスケの尾行を開始した。それまで、ナカムラはすでに1年にわたりカザンに滞在し、スパソ・ブレオブラジェンスキー修道院の宣教コースを受講していた。ナカムラは、ウラジオストクからカザンに着き、静かな修道院生活を送っていた。しかし、カザン市内の主要な通りの一つで、カザン軍管区総司令のサンデツキー將軍自ら彼を目撃し、秘密工作員ではないかという疑いを抱いた<sup>34</sup>。それ以来、ナカムラに対しては秘密の監視がなされるようになった。興味深いことに、カザンでの日本のサーカス団の公演中、ナカムラは同胞との面会を果たし、彼らと文通を行った<sup>35</sup>。しかし、カザン憲兵隊は1911年まで、このことに関する情報を得ていなかった。サーカス団員のほかに、ナカムラは日本国籍で、朝鮮人のボリス・イヴァノヴィッチ・シアン、日本人のハン＝ホン・ケミとの文通を行っていた。彼らも一時期カザンに居住し、後にそれぞれニジニ・ノヴゴロド、サマラに移っていた。

ナカムラ・コウスケは、1909年の春からロシアに居住し、ビザは沿海州で受領していた。彼は1879年生まれで、洗礼を受けていた。正教風には、彼はミヘイ・イヴァノヴィッチ・ナカムラと呼ばれた。神学校で学び<sup>36</sup>、彼の指導教員は東京大主教のニコライ（俗名：イヴァン・ドミトリエヴィッチ・カサトキン、1836-1912）であった。ちょうど5年間、ロシアに出発するまでナカムラは、東京の神学校で学んだ<sup>37</sup>。おそらく、ナカムラがカザンに着き、その神学校に通うようになったのは偶然ではなかった。彼の教師であった（ニコライ）大主教は、何度かカザンに滞在経験があり（1870、1880年）、有名なカザンの宣教師である N.I. イリミンスキー、E.A. マロフと知り合っていた。1881年には、カザン神学アカデミーはニコライに名誉会員の称号を授与した。ニコライは、「カザン神学アカデミーは、ロシアの教会による宣教活動の母である」と述べている<sup>38</sup>。そのため、ニコライはここに自らの優秀な教え子であるナカムラも派遣した。

憲兵は、口頭で日本人正教徒の姿を伝えている。「あご髭はなく、薄い口髭を生やしている。黒いジャケットを羽織り、黒い流しズボンを履き、黒い帽子を被っている」。憲兵によれば、ナカムラは独特の人物で、知能が高く、生気に溢れていた。政治的な信条とし

---

34 НА РТ. Ф.199, Оп.1, Д.777, Л.2.

35 НА РТ. Ф.199, Оп.1, Д.777, Л.29.

36 НА РТ. Ф.199., Оп.1, Д.777, Л.52.

37 Успенский В.Л. Монголоведение в Казанской духовной академии // Монголика-III / сост. И.В. Кульганек, отв. ред. С.Г. Кляшторный. СПб., Фарн. 1994. С.14.

38 НА РТ. Ф.10, Оп.1, Д.10974. Л.1-1<sup>06</sup>.

ては、立憲君主主義者であった。なぜカザンを選んだのか、という質問に対し、ミヘイ・イヴァノヴィッチは、何よりも正教宣教活動に触れることができるのがカザンだけだったからだと答えている<sup>39</sup>。ロシア語や宗教の基礎の他に、ナカムラはタタール語を学んだ。さらに、カザン神学アカデミーは、宣教活動の中心地であった。しかし、ナカムラはカザンに到着してから数年間、この教育機関から距離を置いた。ナカムラは修道院の方がより心地が良いとして、「我々人間は単純で、ここの方がより単純で、教派も少ない」と述べている<sup>40</sup>。授業の中で、ナカムラは隣のシンビルスク県出身の教会教区教師で、チュヴァシのミハイル・アンドレエヴィッチ・クルイシュキンと親しくなった。彼は、日本の自分の親類に、ミハイル・クルイシュキンとともに写った写真を送った<sup>41</sup>。

同時に、カザンの憲兵隊はカザン修道院の謎の日本人の身元調査を活発に展開した。彼に関する情報は、審問地点を通じて、ロシア帝国の隅々まで伝えられた。ウスリー鉄道憲兵局は、近年ロシアに入国したナカムラ姓の人物リストを作成した。この苗字は日本人の間で非常に一般的なものであったため、検索は非常に困難であった<sup>42</sup>。1912年、カザン憲兵局とウスリー憲兵局は、カザンのナカムラは、極東で同様の苗字を持った不審外国人とは一致しないということで同意した<sup>43</sup>。

ナカムラ・コウスケが日本の親類に当てた手紙は非常に興味深いものである。その手紙には、ミハイルと署名してあり、自分の妻のことは、日本語ではフスコとし、正教風にはマリヤとしていた。おそらく、彼女も正教会に所属していたのであろう。手紙では、何度も宣教雑誌の『正教新報』について言及していた。遠くロシアでナカムラは、桜の花や親族を懐かしく思い、母と妻の健康のことを心配し、自分の写真を送るよう頼んだ。同時に、彼は日本の夏とカザンの夏を比較し、ロシアでは夏は非常に良いことを発見した。「今、木陰で本を読めばとても心地よく感じるだろうし、天気はとてもよく、公園にはどこも多くの人が集まり、サモワールからお茶を飲み、ビールを飲み、心から楽しんでいるように見える」と、彼はある手紙で書いている<sup>44</sup>。これは1911年の夏で、ナカムラは熱心にカザン神学アカデミーへの入学試験の準備をしており、アカデミーのことを大学とも呼んでいた。彼は入学できないことを心配し、妻に対しせめて3ヶ月は自分の予定について、親戚や隣人に話さないよう頼んでいた。ナカムラは、試験に失敗した場合、冬には日本に戻るかもしれないと述べていた。

不十分な評価（平均得点は2.83）であったにもかかわらず、ナカムラ・コウスケは、カ

---

39 HA PT. Ф.199, Оп.1, Д.777, Л.52<sup>06</sup>.

40 HA PT. Ф.199, Оп.1, Д.777, Л.53.

41 HA PT. Ф.199, Оп.1, Д.777, Л.20<sup>06</sup>.

42 HA PT. Ф.199, Оп.1, Д.777, Л.56.

43 HA PT. Ф.199, Оп.1, Д.777, Л.63.

44 HA PT. Ф.199, Оп.1, Д.777, Л.67.

ザン神学アカデミーの学生として受け入れられた。この日本国民に関する決定は、カザン及びスヴィヤシスク大主教のヤコヴが行い、彼の信心深さと熱心さ、物静かな振る舞いに特に注目し、宣教部のモンゴル課に迎え入れた。この日本国民の経済状態は困難であったので、宗務院の奨学金を受給していた。ナカムラにとって講義は簡単なものではなく、高い評価は得られなかった。1914年には、第1次世界大戦のために、学業を中断することとなった。ペトログラードの日本大使館の招待により、彼は日本の赤十字病院で通訳として働いた。このことについて、「我々の授業が強制的に中断されることが不愉快だとしても、法的権威に従い、そこに課された義務を忍耐強く遂行するという、キリスト教徒の義務を強く思い起こして、我々は喜んで自らの奉仕の場所に送られるのです。」と後に書いている<sup>45</sup>。同じく1915年に、カザン神学アカデミーのモンゴル課にもう一人の東京の神学校卒業生、ピョートル・ダヴィドヴィッチ・ウチヤマが入学した<sup>46</sup>。しかし、彼はアカデミーを終了することができず、卒業論文の中に彼の名は見られなかった。1916年に、東京出身の日本国民ミヘイ・イヴァノヴィッチ・ナカムラは、カザン神学アカデミーの卒業試験を合格し、神学修士の学位を得た。しかし、外国人として、ロシア帝国内の教育機関で教鞭を執る免許を得ることはできなかった。タタールスタン共和国国立文書館のカザン神学アカデミーのフォンドには、彼の卒業論文である「日本における正教宣教史概論」が保存されている。ナカムラの論文は、全14章からなり、16世紀半ばから20世紀初めにかけての時期を、時代ごとに記述した。日本国内でのキリスト教文化の広がりに関する一般的な情報の他に、ナカムラは、函館、東京、京都、仙台、松山、佐沼、高清水での正教宣教について詳細に記述した<sup>47</sup>。

## おわりに

第1次世界大戦期、ロシアの政治警察及び一般警察は、西方からの移住者の間での潜在的な脅威を探した。帝国西方国境における、いわゆる「ドイツ勢力」やユダヤの「スパイ行為」は、内政における優先事項であった。同時に、「黄禍論」を含む、帝国東方国境についても忘れられることはなかった。たとえば、1914年夏には、「オレンブルク番地」に居住する中国人27名が、カザン警察の監視下に置かれていた。彼らは、カザンで絹販売に従事していた。しかし、同時に地元住民に対し、街や幹線道路の分布、住民居住地間の徒歩での移動時間、橋の分布などについて、繰り返し問いただしていた。そのため、この中国人商人たちには、ドイツのスパイ疑惑がかけられていた<sup>48</sup>。彼らの住居の搜索により、

---

45 НА РТ. Ф.10, Оп.2, Д.1275, Л.2<sup>06</sup>.

46 Успенский Монголоведение в Казанской духовной академии. С.14-15.

47 НА РТ. Ф.10, Оп.2, Д.1275, Л.1.

48 НА РТ. Ф.199, Оп.1, Д.985, Л.5.

8人が留置され、後にカザン県刑務所に送られた。残り16名は部屋を追い出され、警察の監視下に置かれた。しかし、数日後には監禁された<sup>49</sup>。搜索では、軍服を着た中国人2名の写った写真の他には、何も疑わしいものは見つからなかった。

全体としてみれば、憲兵がこの中国人たちに関心を持ったのは、偶然ではなく、27人中でもシン・シュ・ピンに対してまず注意が向けられていた。彼はロシア語に堪能で、部屋に一人で住み、綺麗な身なりをし、金には不自由せずに、商売にはあまり関心を寄せていなかった。集団内では、彼はリーダーであった。しかし、彼は同僚たちが逮捕される前にカザンを去っており、逮捕者の誰も彼の行く先を証言しなかった（あるいは知らなかった）<sup>50</sup>。1914年までに、残りの中国人はカザン県から放逐された<sup>51</sup>。

このように、20世紀初頭のカザンでは、極東や日本と関連する問題が、一時的にカザン市及びカザン県の社会生活の中で生じていた。日本との戦争以前には、帝国の課題は社会プログラムや正教宣教に覆われていたが、1904年以降は極東への慈善援助がロシアの軍需と直接結びついていた。まさに戦時下で、メディアの中では東方の脅威に関するプロパガンダが強化され、1910年代には、ロシアに来た日本国民に対しては、政治警察によりその生活への秘密の監視が行われた。日本人も中国人も、何度もスパイ容疑をかけられ、逮捕された場合もあったが、カザンの憲兵隊はこうした仮説を示す十分な証拠を提出できず、立証は叶わなかった。

キーワード 日本、中国、極東、サハリン、ハルビン、明治維新、ロシアにおける日本表象、東清鉄道、日露戦争、カザン県、カザン、タタール、カザン神学アカデミー、正教宣教、第1次世界大戦

(GABDRAFIKOVA Liliya)

---

49 HA PT. Ф.199, Оп.1, Д.985, Л.7.

50 HA PT. Ф.199, Оп.1, Д.985, Л.23.

51 HA PT. Ф.199, Оп.1, Д.985, Л.91.